

寺院・僧侶からの発信を考える

本号は、本年『宗報』九月号に掲載した第六回六条円卓会議「寺院・僧侶からの発信を考える」の後編として、全体討議を報告します。

◆全体討議

六条円卓会議とは、内外の有識者の知見を得つつ、「自他共に心豊かに生きる」ことのできる社会の実現（宗制）に、宗門がどのように貢献できるのか具体的に模索するために設立された場です。

本年三月二十九日に開催された第六回六条円卓会議では、「寺院・僧侶からの発信を考える」のテーマのもと議論を行いました。『宗報』二〇一六年十一月十号に発表された「10年、20年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像 答申書」では、

「門徒に対してはもろんのこと、各寺院に「ご縁のない方々に対して、いかにしたらきかけていくのかを考えること」は、宗門だけの問題にとどまらず、伝統仏教のすべての宗派に共通

する喫緊きつぎんの課題である。

と指摘されています。そして、現代にみ教えを伝えることの困難さは、真宗教団連合が行った「浄土真宗に関する実態把握調査」に示された「浄土真宗に「ご縁のある方に対しても十分に伝わっていない」という現状とあわせて考えなければなりません。こうした状況を背景として、今年の十二月に行われた宗門教学会議では「宗教者はどのような発信をすべきか」を取りあげ、議論を行いました。宗門教学会議では、現代社会において「み教え」を伝えていくためにはどのようなことを考慮すべきか、などが有識者の先生方を中心に議論されました。しかしながら、「み教え」を「伝えていく」ことを考える場合、どのような方法・媒



武田 一真

安芸教区安芸北組龍仙寺住職。一九七三年生まれ。龍谷大学大学院博士課程修了。博士（文学）。現在、浄土真宗本願寺派宗学院研究員。著書に、『親鸞浄土教の特異性―空海密教との対比を通して―』（永田文昌堂、二〇一三）、論文に、「親鸞における「はじめ」―「もとより」考」（『行信学報』三〇号、二〇一七）、「獲得名号自然御書」の考察」（『行信学報』三一号、二〇一八）など多数。

み教えを伝えるということ

武田先生の発題（詳細は『宗報』二〇一九年九月号「寺院・僧侶からの発信を考

体を用いるのか、既存の伝え方にはどのような問題点・改善点があるのか、といった具体的な問題点まで議論を深めることができませんでした。そこで、本年の「六条円卓会議」では、現代において

「み教えを伝える」ためにどのようなことが可能か、どのようなことを考えなければならぬのか、といった具体的な議論を行いました。

える」に掲載）の中で、「自分を安全圏に置いての言葉というのは、伝わらない」と指摘されたことを中心として「み教えを伝える」ことに対して、多くの意見や感想が述べられました。

その背景には、参加者の多くが実際に法話をしても伝わらないという状況を経験したことがあることや、人口減少や過疎化の影響によって、これまで熱心に寺院へ参られ聴聞ちやうもんされていた方々が少なくなったことで、「新しい世代」へのみ教えの継承が困難になっているという共通認識がありました。そうした中で、寺院での聴聞や活動によってつながる関係性だけでなく、気軽に相談できるような関係性を構築することの必要性や、「新しい世代」に向けた活動、例えば入門講座を始める必要性などが指摘されました。

こうした議論の中で注目されたのは、「法話」に対する厳しい批判が多く出てきたことです。その一つが、武田先生も指摘されていた「自分を安全圏に置く法話」への批判です。最近では、社会問題を取りあげながら法話が行われることもあるようですが、例えば、参加者の中には、僧侶が「本当に苦しんでいる人の苦しみに」向き合わず、「自分は仏法のこと

とを知っている」という態度で児童虐待の話題を出されたことに憤りを感じているという方がいました。また、「法話の場を作る上下関係」への批判が挙げられました。自死遺族の方との面談における自分自身の態度が「上から目線」ではなかったかと反省している方や、「仏法を知っている側が、仏法を知らない人に教える」ということとは決定的に違い、法話については問いを共に仰ぐという立場を忘れてはならないという意見がありました。

「自分を安全圏に置く」ことへの批判は、そのまま僧侶の「不用意」な態度への批判ともなりました。一方で、この議論によって「僧侶の在り方」そのものを問い直すという基本的な態度の重要さも確認されました。

様々な意見が出される中、議論は現代的な問題へと移りましたが、その中で「かつての伝道から学ぶ」必要性が指摘されたことに注目したいと思います。古いお説教の筆耕録によると、法話を聞いて

てうなずいていてる方をたしなめてる部分があると指摘される方がいらつしやいました。つまり、法話が「わかりやすい」話に変換されて受け取られることに対する問題を指摘されていたのです。「わかりやすい」に力を入れすぎると、仏教やお念仏の本質を見落とすことにながりがかねないという危惧の現れだといえるでしょう。み教えの本質に則りつつ、現代人に響く「わかりやすい」表現の探求が、今後も求められてくること

が、改めて浮き彫りとなりました。

が報告されました。

- ・ 現代の中学生、高校生、大学生は、それぞれ同じ学年だから好きな音楽やゲーム、興味の対象が共通しているかといえは、まったくそうではなくバラバラである。
- ・ 楽しいと感じること、したいこと、旅行に行きたい場所など、共通すること、共有していることがほとんどない。
- ・ こうした世代による共通性、あるいは各個人の共通性の欠如はそのまま宗教への態度にも表れており、「死んだら何も残らない」「死んだら山に行く」「輪廻する」「浄土に生まれる」といった様々な意見が出てくる。

現代においてみ教えを伝えるために

み教えを伝えるための最も基本的な事柄とともに大事なこととして指摘されたのが、み教えを伝える相手、「現代社会」の状況でした。

富金原先生がご発題の中で、現代社会における若者の死生観について言及されましたが、各種教育機関で教鞭をとられている参加者の方からも次のような現状

- ・ しかしながら、僧侶に限らず、誰かに話を聞いてもらいたいという思いはあると感じている。

最後の点に関しては、全国各地で展開されている「寺カフェ」や「僧職男子に癒されナイト」などの事例を挙げつつ、僧侶との会話を求められている方は比較



富金原真慈
ふきんばらしんじ

山陰教区江津組蓮敬寺住職。本願寺派布教使。自坊にもどり、本堂の隣にカフェを営業。地域の憩いの場として、ニュースなどでも紹介（「ニュースシブ5時」二〇一七年十一月二十六日放送）。カフェでは、「産後ケアのバランスボール」「ワークシヨップ」「坊主バー」などの他、教区主催の「婚活イベント」や「まちづくり会議」の会場提供など、多様な寺院活動を展開している。

蓮敬寺HP <https://www.renkyoujin.net/katudouhmi>

的多いのではないかと指摘された参加者もいらっしやいました。

こうした「社会の多様化」ともいうべき現状に対して大事だと指摘されたのが、次の二点です。

一つめは、「間口を広げていく」ということです。現代社会には、共通性の欠如があることは先程お伝えしましたが、これは同時に、誰かに話を聞いてほしい（私）のことを共有してほしい）人も多いということです。それらの人に対して、「ここにに行けば話を聞いてもらえる」「ここ

ではこんな人と話ができる」、といった情報が届いていないのではないかという意見がありました。そうしたことも背景にして、どのような人であっても対応できるようにということと、「ピンポイント」での対応というものが求められるのではないかという意見がありました。この「ピンポイント」という点について、現代においてはインターネットの利用履歴を活用して、個人に合わせた情報提供がなされていること（例えば、インターネットのあるサイトで物品を購入すると、

関連する商品をお勧めされるということが行われています）を挙げながら、そのような「個人化」という方向性が今後重要な視点になるのではないかと指摘されました。

この「間口を広げる」ということと「ピンポイント」対応の両立はとても難しい問題ですが、富金原先生は一つの試みを始められているそうです。それは、インターネット上に参加できるもの（会議や法要など）をつくり、そこに様々な方が参加できるようにし、参加の際にはアカウンを登録するようにする。そうすると、どの時に誰が参加して、どのような発言をしたのか、といったことが把握できるという「後追いシステム」ができる。こうしたインターネットを使うことで「間口を広げ、しかもピンポイントで」という難しい問題を乗り越えようとされているということでした。

二つめは、先のインターネットにも関わりますが、「僧侶に会う、寺院に来る」にいたる前段階をいかにつくっていく

か、ということです。討議ではこんな例えが出されて問題が指摘されました。私たちは「コンサート」に行くことがあるが、その前段階として評判を聞く、CDを聴く、以前のコンサートビデオを見るといったものがあり、コンサートに行く時にはすでに「この歌手が好き」という前提ができあがっている。それに対して、「お寺に来てください」という場合には、その「前段階」がほとんどできていない状態ではないのか。やはり、いきなり「来てください」というのは、かなり厳しいのではないか。

この問題に対する大事な視点として指摘されたのが「参拝できない方に届ける」という発想です。参加者の方には、法座をビデオ撮影し、それを病院へのお見舞いなどにお届けしている方がいらっしゃるかもしれません。近年は、地方から京都への参拝がかなわない方も多くなってきた中で、臨場感を持って法要を伝えるためにVR（ヴァーチャリアリティ）を用いることはできないか、という意見が

出されました。

参加者からは、寺院に来てもらうことが困難な高齢者であっても、多くの方はスマートフォンを持っているのだから、それを利用するなど新たな方法を模索する必要があるとの指摘が多く出されました。

宗門に期待すること

「み教えを伝える」ための新たな方法が模索される中で、インターネットの活用は不可欠という共通理解があります。が、現状、全国の寺院でのHP等の活用は低いという結果が出ています（第十回宗勢基本調査）。また、単純にHP等の開設状況だけでなく、活用状況がどのようなものか、という具体的な調査も今後必要だと考えられます。

こうしたインターネットの活用の必要性に対して、その困難さも種々指摘されました。例えば、「インターネット検索の上位に来るためにはある程度予算も

必要である」「五分の動画であっても何時間、何十時間という編集作業が必要であり、インターネットへの更新をいくことが僧侶個人で可能なのか」といった意見です。加えて、インターネットの場合、YouTubeに代表されるような「動画配信」が考えられます。すでに「動画配信」において人気を博した僧侶もいるようですし、寺院で行う催しもよおをはるかに超える数万人規模での拡散も可能であるという利点もあるのですが、「動画配信」には「ただ何かを流し続ける」のではなく、きちんと整理された数分の動画が好まれるという傾向もあるため、法要や法話をどのような形で伝えていくかという難しさがあると指摘されました。こうした「個人の限界」という議論から、宗門にどのようなことを期待するかといった話題へと移っていきました。

宗門への期待として一番に指摘されたのが、各地域での学習環境の整備です。現在では、宗門関係校を卒業した後、各地域に戻った方々の学習の場が減少して

いること、加えて、兼業の方が増加していることで、個々人の学習時間も非常に減少しているそうです。そうした時、宗門がインターネット事業によって、仏教や浄土真宗に関する講座を配信し、誰もが、いつでも、どこでも学習できるという環境を整えることは、今後非常に大切になるのではないかとこの意見がありました。

すぐに始められることは何か

み教えを伝えることとはどういうことか。現代においてみ教えを伝えるためには何が必要か。そうした議論を続けていく中で、今まで以上のインターネット活用という提案がありました。その困難さも指摘されました。このような議論をしていくと、では具体的に何ができるのか、何から始めるべきなのか、といったことが問題になるのですが、会議では具体的な提案として Wikipedia（ウィキペディア・インターネット百科事典）の活用

が挙げられました。なぜこうした提案がなされたのでしょうか。一つの理由として、現在の Wikipedia には、地域の情報が圧倒的に不足しているため、各地域に存在する寺院等の情報を今後取り込んでいく必要があるそうです。しかし、それ以上に大事なことは、インターネット上で正しく、客観的な情報を提供したい方々、正しく、客観的な情報に迅速にたどり着きたいという方々、双方にとって Wikipedia は非常に有効であるということでした。加えて、Wikipedia はインターネットに接続できる環境があれば、自由に書き込み、一度書き込んだ後も編集を加えていくことが可能であるため、例えば、寺院の基礎情報を書き込んだ後で、寺院で催しをすることなどの情報を追加していくことが簡単にできるということでした。

こうした Wikipedia には、ホームページ作成より比較的簡単であり、正しく情報が伝えられるという利点があります。さらに、参加者が指摘されていたよう

に、Wikipedia は不特定多数の方々が編集できるという点を活用することが大事です。例えば、寺院を会場にして、その地域に住む方々が集まって、寺院の歴史を話す。あるいは、地域の歴史や、地域の文化、特色を話し合い、それを Wikipedia に掲載していくことで、地域コミュニティの活性化にもつながる可能性があるということです。

全体討議では、様々な媒体で、対象に応じた発信の必要性を議論いただきました。今後は、伝統的な方法を見直し、時代に即応したものを常に考えながら、宗門内の様々な立場の方や若い方々の感性も取り込んで一緒に考え続け、発信していきたいと考えております。

（本願寺派総合研究所 教団総合研究室）